

[目的]

本研究では、親との距離や親の態度に対して子どもが抱く心情と、アイデンティティ確立の時期にある中学生の思考・行動とが関係しているとし、そこに介在するであろう二重拘束的コミュニケーションと主体性との関係に焦点を当てていく。仮説は以下である。

- ・ 性別、兄弟の有無、祖父母との同居は、心理的分離、主体性、ダブルバインドの認識に影響を与える。
- ・ 心理的分離が充分になされていれば主体的に行動することができる。
- ・ 心理的分離が充分になされていない場合、ダブルバインドを認知しやすい。
- ・ ダブルバインド的なコミュニケーションの認識は、主体性を阻害する傾向にある。
- ・

[方法]

上地(1987)の心理的分離尺度短縮版 25 項目、主体性尺度(浅海;2006)15 項目、筆者が作成したダブルバインド尺度 15 項目の計 55 項目で作成した質問紙を、10 月下旬から 11 月上旬にかけて、千葉県内公立中学校 2 校の 1 年生から 3 年生に、性別、クラスを問わずに配布し、調査を行った。

[結果・考察]

心理的分離と主体性には性差は認められなかったが、ダブルバインドの認識については、男子よりも女子の平均の方が有意に高かった。また、祖父母との同居が心理的分離、主体性、ダブルバインドの認識に影響を与えるという仮説に関しては、心理的分離に差が認められ、祖父母と同居している者の平均が同居をしていない者の平均よりも高く、有意であった。しかし、前者は平均の差が僅かであり、後者ではサンプルに大きな偏りが認められたため、一概に正確な結果とは言い切れない。

さらに Table1 のように主体性尺度とダブルバインド尺度を高低得点群に分け、心理的分離尺度を従属変数として分析したところ、主体性では心理的に分離、特に親への機能的依存と同調・気遣いをしていれば、主体性を持って行動できることがいえた。

加えて、ダブルバインドと心理的分離についても関係が認められ、親への機能的依存が高ければダブルバインドをしないが、親への不審・怒り、親の期待への嫌悪感、親の承認・支持への不満があれば、ダブルバインドを認識するという傾向であった。

一方、ダブルバインドを認識していてもそれが主体性の妨げとなっているということはいえなかったが、ダブルバインド的なコミュニケーションを受け取っていると思うことが少ない場合、自分の考えを積極的に表現する傾向にあるということがいえた。

Table1 主体性得点とダブルバインド得点の分散分析 () 内は標準偏差

		ダブルバインド	
		高得点群	低得点群
主体性	高得点群	1.971(.511)	1.629(.397)
	低得点群	1.852(.458)	1.516(.433)
F 値	主体性	8.48*	

ダブルダインド

74.47***
